

スクールカウンセラーを招いて 「安全ネット第3回公開学習会報告」

鹿野 真美

東京弁護士会所属弁護士

スクールカウンセラーの役割

安全ネット第3回公開学習会は、2013年12月6日、現役のスクールカウンセラーをお招きし、「スクールカウンセラーの立場から見た学校現場」というタイトルで開催されました。

講師の久山（くやま）みちるさんは、教師経験のある、スクールカウンセラー歴10年の臨床心理士で、複数の中学校と高等学校に、非常勤として勤務しています。

スクールカウンセラーは、各学校に週に1日、7～8時間程度の勤務が基本とのことで、自分が勤務していない残りの日々の様子がわ

からないことから、やはり、教員との連携は重要だということでした。

特に、同じ「ひとり職」である養護教師とは、連携を密にしているということでした。

スクールカウンセラーの多くは臨床心理士の有資格者だそうですが、臨床心理士一般が精神科医と対比できるのと同じように、スクールカウンセラーは生徒指導教諭と対比できる

というお話でした。

具体的には、精神科医は特定の病気であるかどうかを診断し、薬を出すが、臨床心理士に診断をすることはできず、薬も出せない、精神科医は、病気を治す役割、いわば「修理

モデル」だが、臨床心理士は、何らかの問題を抱えていることを「治す」のではなく、それを前提に、いかに成長しくかという「成長モデル」と言える、そして、両者は医療の現場でコラボレーションをすることもある、と。

同様の特徴と関係が、学校現場の生徒指導教諭とスクールカウンセラーとともに当てはまり、スクールカウンセラーは、「治す・直す」のではなく、問題をふまえてどうするか、という「未来志向（思考）」という説明でした。

個人的に印象に残ったのは、「学校現場の主役は、教師と生徒であって、スクールカウンセラーは黒子であるべき」という話で、「学校

を卒業し、何年も経った後、「あのとき、スクールカウンセラーに世話をなつたな」と振り返つてもらえることは悪くないが、結婚式の招待客リストに載つてはいけない」というたとえが、新鮮でした。どこか、宮澤賢治の詩「雨ニモ負ケズ」に通じるところがあるような気がします。

スクールカウンセラーの仕事

カウンセリングは、アドバイスとは違い、相談者自身が自分の問題を整理する手伝いをして、問題を解決する能力を引き出すプロセスです。相談者自身の能力が引き出されることで、その後に発生する類似の問題にも自分で対処する応用力が養われるということでした。

そして、カウンセリングを受けること、悩みを相談することは特別なことではない、悩みを相談する人は特別な人ではない、ということを、よく理解してもらえるよう、強調しているとのことで、相談しやすい雰囲気づくりに努めている様子がうかがわれました。

ところで、カウンセラーと聞くと、対個人との関係が重視され、個人の誰にも打ち明けられない悩みを聞く、いわば、懺悔を聞く神父か何かのイメージが強いかもしれません。スクールカウンセラーの仕事は、悩みを抱えている生徒からの直接の相談に限らず、その生徒とかかわりを持つ教師から、その生徒の問題をどうしようかと相談されて相談に乗ることが多いようです。

学校内の環境調整もスクールカウンセラーの重要な仕事ということで、カウンセラーといふよりもソーシャルワーカーに近いと感じました。

そして、スクールカウンセラーは、教師自身の個人的な相談を受けることもあるとのことでした。この点については、参加者から、学校現場で教職員間の横の連携が失われているのではないかという指摘があり、教職員間に悩みを打ち明けるざっくばらんな関係が築けないことで、教職員が心の問題を抱え、それが子どもたちの教育環境を悪いものにして

いる面もあるのではないかと思いました。なお、週に1回の勤務ということでしたが、カウンセリングという仕事の性質上、緊急時には勤務日以外にも対応せざるを得ないこともあります。

スクールカウンセラーとしてのやりがいと困難

スクールカウンセラーとしてのやりがいについて、最初に挙げられたのは、相談者が自分で問題を解決できるようになっていくプロセスに寄り添えること、でした。

また、中立的な第三者として、学校批判の言葉に対しても、「共感」の態度を示しつつも「同調」はせず、そうして、両者の間の調整を図つてはいるということで、この点、中立的第三者だからこそできる、というやりがいがある一方、中立的第三者の立場を守る難しさもあるというお話をでした。

現在の勤務態勢（週1日勤務、複数校掛け持ち）のもとでは、集団的守秘義務（学校全体で秘密を共有し、対外的には秘密を守る、